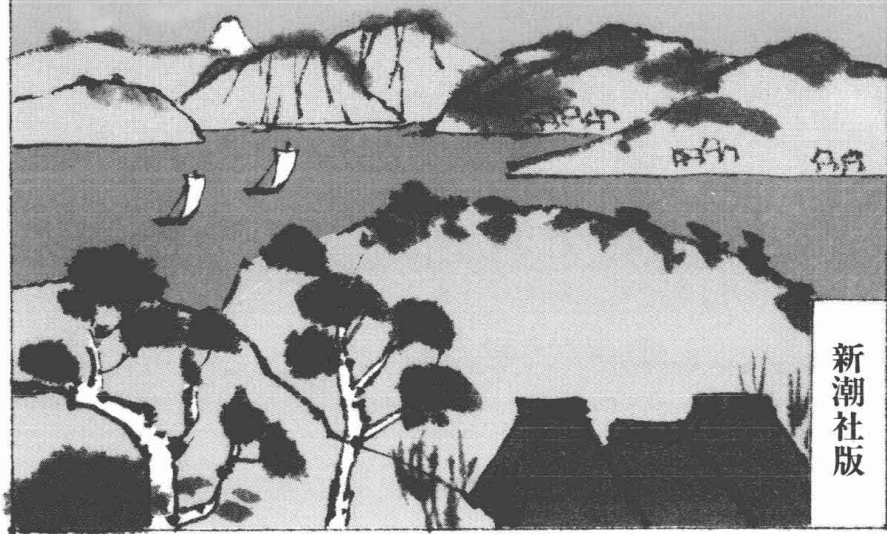


井上ひさし金芝居

その一

井上ひさし金芝居

その一



新潮社版

井上ひさし全芝居 その一

発行 昭和五十九年四月五日
四刷 昭和五十九年五月三十日

著者 井上ひさし

発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七十一
業務部〇三(二六六)五一一一
電話 編集部〇三(二六六)五四一一
振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 大日本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hisashi Inoue. Printed in Japan, 1984.

定価 二七〇〇円

井上ひさし金芝居その一・目次

うかうか三十、ちよろちよろ四十

五

さらば夏の光よ

三

日本人のへそ

八

表裏源内蛙合戦

一五

十一ぴきのネコ

二五

道元の冒険

三三

金壺親父恋達引

四九

珍訳聖書

四五

藪原検校

五七

初演記録

六二

解説

扇田昭彦
六四

装帧
安野
光雅

井上ひさし全芝居 その一

うかうか三十、ちよろちよろ四十

とき

むかし

ところ

東北の、とある村はずれ

ひと

とのさま

お侍^じ医^い

ちか

権^{けん}ず

れい

ご家来

プロローグ

村はずれの畠の中央のあばら家。

白い花びらをつけた桜の木が左右に一本ずつ。

沈みかけた春の陽が、桜の花びらを赤くそめはじめている。

大籠^{はけご}を背負った野良婦りのちかが下手からあらわれる。

どこかで歌う声がする。

――弥生^{やよひ}のあられ

皐月^{さつき}のつゆは

働き者の味方^{とも}ども

しゃれた女房と

馬鹿とのさまは

根気がさっぱど

つづかない……

舞台中央に來ると、ちかは客席にむかつて手を合
わせる。

ちか おてんとさま、今日もおかげさんで、何事もねぐお
わりんしたし。今夜はわりイ夢などみねえようにしてけ
たんせ。だば、さえなら。

ちかはどこからかきこえてくる声にあわせて歌い
ながら家に入る。

それをみとどけて、両側の桜の太木のかげから、

とのさまとお侍医があらわれる。

とのさまは軽く跛^{びこ}を引いている。

とのさま なんて感じのいい、あいくるしげな娘だべなあ。

おじい、ここんどこおれはあの娘のことでも手につ
かねえのし。

お侍医 なんて見事な桜だべなっし。

とのさま ほら、きけ、おじい。なんてあいあいしい声な
んだべね。

お侍医 とのさまのこと歌ってるし。

とのさま うん、あいぎょうのあるいい声でなし。

お侍医 だども、いい歌じゃねえなし。

とのさま 根気つづけてきけ、おじい。

お侍医 ざらにある声、ざらにある顔、ざらにいる娘だし。
とのさま ざらにいる娘が、あげにあかるい瞳を持ってる

か？ あげに楽しそうに笑う娘をいままでみたことあつ

かな？

お侍医 娘はみんな楽しそうに笑いますし。

とのさま そのざらにいる娘たちは、笑えるときしか笑わ

ねえし、泣きてえときはいつどこでも泣くではねえか。

お侍医 泣いてる娘もまた可愛い、犬は年中用を足し、娘

は年中泣くもんだ、と、としよりはいいです。

とのさま だども、おじいそのざらにいる娘の中でこげ

に堂々とおれの悪口をうたう娘が一人でもいるか？

お侍医 この娘だつて外にいるのがとのさまだとは思つて

いねでしょう。

とのさま おじいにはあの娘がどんなにいい童わらしかわかんね

のし。

お侍医 恋してみれば鼻欠けもえくぼ、と、としよりはいい

いますし。

とのさま ああ、せめておじいがおれにしゃべるぐらい、

おれの心をあの娘に打ち明けることができたならばなんぼ

ええべな。

お侍医 やつてみたんせ、しゃべつてみたんせ。ざらにい

るなみの娘なら若者の打ち明け話を決して悪くはとらね

えもんだ、と、経験のあるとしよりがいますし。その

若者がよつぽどいやな奴でねえかぎり、若者の勇気をそ

つけないくつかえすことなどいたしますめえし。

とのさま だば、おじいならどげな法で打ち明ける？

お侍医 どげな法もこげな法も、思つてることをただ……

口にまかせて。

とのさま おれはきつと舌がまわらねくなるべし。きつと。

お侍医 だば、やめたんせ。

とのさま だどもおれはあの娘を好きなのし、この桜がか

たくてちつちやい蕾つぼみをつけてたところから。

お侍医 打ち明ける勇気がなかったば、あとでご家来衆を

よこして、あの娘をお屋敷へ召し上げたんせ。同じ屋敷

の下だば、ひよんなことで、むこうからとのさまに恋を

するよなこともねいとはいえますめえし。

とのさま いますぐ、あの娘と話をしてえのし。あの娘の

心をいますぐ欲しいのし。

お侍医 だばもはや、おじいに手立てはないねし。

とのさま 病いと名のつくものは全部退治した長崎修業しゅぎょうの診

立ての名人のおじいにも、もはや手立てがねえのすか？

お侍医 恋に手立てはねえなつし。胆いつ玉だけし、勇気だ

けし。

とのさま おれが恋を打ち明けたら、あの娘はどうするべ

えか、まっかになつて卒倒しゅたうすつかな？

お侍医 さあ……

とのさま な、おじい、これじゃあんまり突然すぎるね？

お侍医 あんたは殿様てんやうだもの、少々少々の無理は誰でも知らぬ

ふりしてすましてくれます。おまけに、恋物語の最初は、

たいいてい突飛とつぱいなものと決つとるようだし。

とのさま (自信をとりもどし) うん、おれはとのさまだ

もんなあ、この村のなかでいちばんえらくて、おれをまんなかにして、世の中がぐるぐるまわってるんだな。

お侍医　だば勇氣を出したんせ。

とのさま　だども今日のところは、まずこの桜の咲きつづりを賞めたり、とりとめのねえ話をすべし。また明日、逢うのが楽しみになるように。

お侍医　まだ話もしねえうちに、明日の首尾がわかりますか？

とのさま　おれはたしかにあの娘を仕合せにできるね。たいていのものはそろってるし、悪いのは足ばつかしだ。

お侍医　だば、ご決心の変らねえうちに、あの娘にあいまして。おじいが雨戸を叩くから、雨戸があいたらはなしかけたんせ。

とのさま　ちよつと待てや。おじい、袴のひもがゆるんだりしてねえか？

お侍医　立派な男前だしよ。

とのさまとおじいが雨戸に近づくと雨戸があきはじめ、建てつけが悪いので外へ倒れそうになる。
とのさまとお侍医が肩でそれを支える。

ちかが顔をのぞかせる。

ちか　あらつ、ありがとし。

とのさま　ずつとこのまんま、雨戸を支えてるすか？

ちか　今夜は家の中から桜を眺めたいのし。だから、雨戸をどこかのすみに立てかけてけたんせ。

とのさま　で、その雨戸を入れるのは誰がするのすか？

あんたがすか？

ちか　そのときはそのときで別な思案がありますし、まず、どこかに立てかけてけたんせ。

とのさまとお侍医は雨戸を家の横に立てかける。

お侍医は上手の桜の下に腰を下ろす。

とのさまは縁側に立っているちかとむかいあう。

とのさま　この夜桜はまた格別だべなアし。

ちか　（大きくうなずいて）　ない。だから春がいちばん好きだし。

とのさま　おれも春は好きだなア。

ちか　あたしはこの縁側に坐つて夜の風をいっぱい吸うのが好きだし。そして、そのうちにいつの間にかねむってしまうのも。

とのさま　いつの間にか？　家の人が心配して起しにくるべしな。

ちか　こない。

とのさま　ねこんでしまってるからわからねえのでしょ。

家のだれかがあんたをそつと抱いて寝床にはこび、やわらかな布団を胸元までかけてくれる……

ちか（笑つて）いいえ、あたしは朝までそのまんまねてるのし。

とのさま おお、危ねえなし。それだば、お家の人も気がきかなすぎる。

ちか（また笑つて）いえ、家の人なんて一人もいねえのし。あたしはたった一人で暮してるのし。

とのさま わあ、なじよにもかじよにも、けなげな人だべなあ。だども畠のなかの一軒家で、雨戸をあけっぱなしで眠り呆けるのは、ちつと不用心だア。

ちか この平和な村に、一人でも悪い人がいると思うすか。

とのさま でも、夜中に風の吹くこともあるべし？

ちか 吹いたら吹いたで目をさまします。

とのさま そのときは、おれが雨戸を立てましょ。

ちか 見も知らね人に夜中の仕事を引きうけてもらうわけにはいかねえし。

とのさま だども、おらだはこげに打ちとけて話をしてるでねえすか。まるで十年も昔からの恋仲みてえに。

ちか（とのさまのいったことを気にしない）それに、夜、

風が吹くか吹かねえか、宵の空をよく見りゃわかります。赤っぽい月は強い風、どんよりどよよした月は雨か夕

立ち、銀色の月は上天気。

とのさま 学者のように自信たっぷりしゃべるんだなあ。

ちか こげなことがそげに面白いべか？ 百姓なら誰でも知ってますし。まっ赤つかの夕暮に白い朝はあたしら百

姓の味方、鱗雲（きんぐも）の空は根がさっぱどつづかねえで雨を持ってくる、念入りに化粧した女房のように、馬鹿などのさまのように。

とのさま 根がさっぱどつづかねえ？ どことのさまだべね。このすか？

ちか さあ、おらだの村のとのさまではねえべ。おらだの村のとのさまはあんまり大人しくて、誰彼からすっかり忘れられとりますもの。

とのさま あんたはなんじよな立派な女子（おなこ）だべ。人の悪態つかねえし、この上なく仕合せそうで、苦勞はなんにもねえようだ。

ちか 欲しいものがなんにもねえんです、だから苦勞もねえのだべし。

とのさま 欲しいもんがなんにもねえんですと？

ちか ええ。朝飯を切りつめ、昼飯をつつましく、夕飯を地味にして、夜は大の字になって寝ころぶことができれば、それだけでいいのつし。それ以上のことを望めばぜいたくつうもんし。

とのさま だば、恋は？ 恋はぜいたく品じゃねいでしょうし？

ちか 間に合つているところですし。

とのさま 間に合つてる？……つうと、もう誰かと、恋をして……つうのすか？

ちか おらだでも恋ができるがどうかわかんねども、先を

契った人がいます。村の人が誰でも全部するように。

とのさま おお、それは恋じゃねえ。

ちか じゃ愛かもしれませんし。

とのさま 思いもかけねえことだ。

お侍医のところへかけよる。

とのさま おじい、あの娘には恋人がいるつう。

お侍医 あんまりやさしく出すぎたのし。とのさまの身分をあかしたらいいべし、堂々と威厳をもつて。

とのさま うん、きつとたまげるべね。

お侍医 そこで、少し強く押しつけたんさい。

とのさま なにを押しつける？

お侍医 あんたの身分。

とのさま うん、わかった。

とのさま、落ちつこうとこころみながら、ちかのそばに歩む。

とのさま あの名、女子おなこ。おれ、ここのな、とのさまなん

だども……

ちか 存じとりました、とのさま。

とのさま うわあ、かなねえ。

ちか いまあんたさまが足を引きずってむこうへいきなさ

ったども、とのさまの足の悪いつうことは、誰でも知ってますし、そこがおらだ村のもんとちがうところでもあるし。それにおらだの村のとのさまはいつも、としよりのお医者さまをおともになさっておしのびなさるときいてましたし……それやこれやでおらにもわかりんした。

とのさま あんたは少しもたまげなかつたんか？

ちか ない、少しも。

とのさま おれはあんたを嫁さんにしたかつたのし、おれの。こんどはたまげた？

ちか だば諦めなさんせ。いましがたいつたども、あたしには、村の大工さまで権ずという人がいますし。

とのさま その大工さんには、村の娘がわんさわんさいるだろに。

ちか だども、あたしには権ずはたつた一人す。

とのさま なじよに仕合せな若者だ！ だどもおれはとつても諦められねえなあ。なあ、女子おなこ。その権ずとおれをちよつとでいいから、くらべてみねえか？ おれだつて、あんたのためなら権ずと同じぐらいのことはしてあげれるよ。

ちか あたしだは、田植がすみしだい一緒に暮すのし。権ずはここにきます。

とのさま おれの足の悪いのがたたつたのだから……

ちか いいえ、とのさま。娘は若者の歩く姿に恋をしたりしません。

とのさま そのほかのところでは、村でいちばんとびぬけてるはずだとも、おれは。

ちか たぶん出番が遅すぎたのし。

とのさま 遅すぎたとや？ じゃ、村の若者は、吹雪の冬に恋をはじめのすか？

ちか さあ。吹雪の冬に、村人衆は鶏をころして餅と煮てくいます、そんなとき、首をひねられ、毛をむしられた鶏は二度と決して卵を産みませんし。

とのさま なんてつめてえ返事だべなあ。

ちか あの、雨戸をしめてけたんせ。あたしが、とのさまにお願いできることついたらこれぐらいだもなあ。せっかく、雨戸をかたづけてもらったのに、もう雨が降りそう……

とのさま 夕陽がこげに美しいのに、なして雨が降んのし？

ちか あんまり夕焼が美しくなりすぎましたし、どんよりしてあんまり真赤すぎます。

とのさま おったまげた娘だ、はつきりしすぎる。

ちか、家の奥に姿を消す。

とのさまは、お侍医と二人で雨戸をいれる。

とのさま おったまげたぞ、おじい、あの娘はきつと、毛むじゃむじゃの胸してんだ。

お侍医 いや、とのさま、毛むじゃむじゃどころか、あれがまっとうな娘つものでしょ。

とのさま おじいの処方はきかねえな。

お侍医 いや、恋をのがした若者におじいの処方によくきくぞなし。

とのさま そういえば、ひどく加減が悪くなってきた、頭の中で猫だの犬だのがあばれまわってる。胸がむかむかして心臓が盆踊りしている。

お侍医 刀傷ならすぐ治るども、口でつけられた傷は治るのに辛抱がいるでしよ。

とのさま おじいはへボなヤブ医者だ！

お侍医 さ、あの娘のことは忘れてしまふべし。

舞台、にわかに暗くなる。ピカリと稲妻が走り、ゴロゴロと雷。

雨がばたばた降りはじめる。

お侍医 憶えていいのはあの娘でねぐ、あの娘の言ったことだし。二月の大雪、三月のもや、四月の雷、みんな美しい秋のしるし。

とのさま その秋に、おれはあの娘に焦れぬいて、焦れ死にしているべ。だども、なんつうさばさばした娘だべね。

お侍医 くよくよなさったらいけませんえ。男の数ほど女はいるんだからねし。しかも、あんたさまはこの村のと

のさま。

とのさま それはあんまりあてにならない。おれは、なんだ気分がわるい、頭がどうにかなりそうだなあ。

お侍医 早く屋敷さ帰るべし、ずぶぬれになって、風邪でもひいたらなりません。

とのさま 桜の花がこの雨できれいに散っちゃうべな。

お侍医 来年また咲くんすよ。さ、早く、早く。とのさま、早く。

とのさま ああ、なんて娘だべなあ、おれを迷わせっぱなしでいなくなった。

お侍医、とのさまをせきたてながら上手へかけこむ。

まったく暗くなる。

やがて、雨の音が遠のき、子供のうた声をする。はじめは、とても遠くて節も文句もききとれないが、しばらくすると、

—— 弥生のあられ ——
であることがわかる。

プロローグから十年目の春である。

ちかが針仕事をしている。そのそばに権ずが薄い布団にくるまって寝ている。縁側に腰を下ろし、うたっていたのは、権ずとちかの一人娘、れいである。

れい 弥生のあられ

皐月のつゆは

働き者の味方ども

しゃれた女房と

馬鹿とのさまは

根気がさつぱど

つづかない……

権ず

童

しまえ！

ちか 権ず、大きな声だすと養生に悪いよ、子供が好きで

うたってんだもの、うたわしといてもいいでねえか。

権ず おれがこげにいらいらしてるのがわかんねのか、い

らいらすんのがおれの病氣に一等悪いつうのも知ってる

べ。

ちか 今夜は村の春祭りだし、この童はうきうきしてるの

し。大人のあたしだってうれしいもの。

権ず この八年間つうもの、おれがこの病でどげに苦しん

だかおめだにわからねえのか。どげにおっかねえ夢ばか

り見てきたか誰にもわからねえんだな。

ちか（なにか言おうとするがやめる）さ、れいちゃ、出来たし。お祭りの衣裳。

れい（しょんぼりしていたが、たちまち元氣をとりもどす）わあ、きれいな衣裳。

ちか あのね、れいちゃ。この衣裳を村の酒屋まで届けてたんせ。これを酒屋のおばちゃんに渡すとね、おばちゃんが錢くれるから落さねように持ってきてたんせ。

れい あら、これおらの衣裳でねえの？

ちか たのまれた仕立てもの。ほら、酒屋にれいちゃと同じ年の童がいたべ？

れい うん。だども、おらの寸法をとって、おらにびったりするように作ったじゃねいの？

ちか 酒屋のおばちゃんがね、うちの童はれいちゃと年かつこうが同じだから、れいちゃに合わせて縫ってけろっていったのし。

れい 春祭りには衣裳こしらえてくれる約束だったべし

……

ちか 聞きわけてけさいね、れいちゃ。れいちゃは自分ですってよりずつときれいな童だから、いま着てるその衣裳がとつても似合う。れいちゃにはわからねども。

れい かあちゃはいつも春になるとそういうのね。春の袷はこれ一枚だけだし、もう丈も袖も、とつても短い。ちか いまにきつとつくつてあげるし、だから、さあ、早

くいったんせ。錢をもらつたらまっすぐ帰るべしよ。

れい うん。

ちか 来年の春、きつと新しい衣裳をつくる。約束するべし。

れい うん。

ちか そのかわり今夜は赤鮭に、赤飯たいて、祭りの御酒をのむべしね。

れい（着物をかかえて、しぶしぶ下手へ歩きだす）うん。ちか まちがいなく酒屋のおばちゃんにね。

れい うん、あたしもう八つよ。だから大丈夫しい。

れい、下手へ去る。ちかが縁側に立って見送る。

ちか あの童が生れてもう九度目の春がめぐってきたのしね。ね、ごらん、あの童の歩き方。大人のように気取つて。ね、あの童が仕立代をもらつてきたら、まず権ずの薬を買おうね。棕鳥の黒焼がよくきつうよ。

権ず（不貞くされて）薬など飲んでなんの役に立つべ。

ちか 権ずには一ときも早く治つてもらわなくちゃなんねえし。だから苦しくとも大人しく寝てねばなんねえし、苦くとも薬のまねばなんねえし。

権ず 一度とりついたら二度とは離れねえ業つく病だわい、治るあてなんかあるか。

ちか あたしやれいちゃのためにも早くよくなって、ね、